

中学保健体育科
ニュース

機関誌

大修館書店

NEWS FILE

.....スポーツ庁2016年12月15日(木)

スポーツ庁が『平成28年度全国体力・運動能力、
運動習慣等調査結果報告書』を公表

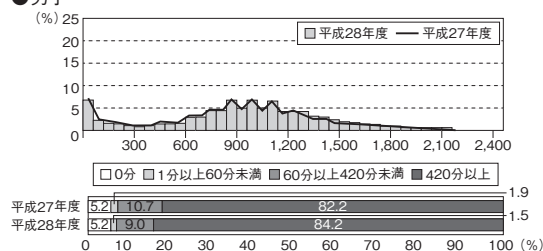
スポーツ庁は2016年12月15日、『平成28年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査』の結果を公表しました。

体力合計点は、中学校男子が42.0点で、最も高かった平成24年度に近い値となりましたが、握力、ハンドボール投げが平成20年度の調査開始以降、低下し続けており最も低い値となりました。一方、女子の合計点は49.4点で、平成20年度の調査開始以降、最も高い値となりました。

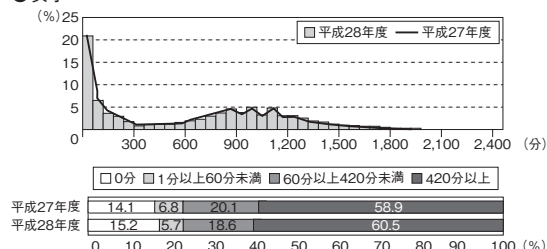
また、1週間の総運動時間が0分の生徒は、中学校男子で約5%，中学校女子では約15%で、女子は前年度より1ポイント増加しており、二極化の傾向が進んでいます。

この報告書は文部科学省のウェブサイトで閲覧できます (http://www.mext.go.jp/sports/b_menu/toukei/kodomo/zencyo/1380529.htm)。

●男子



●女子



1週間の総運動時間の分布の前年度との比較

CONTENTS

年間指導計画作成のススメ～全体は部分の総和にあらず～	佐藤善人（東京学芸大学）2
学校現場におけるスポーツ傷害への対応	山本利春（国際武道大学）5
平成29年度用副読本の主な変更点	8

年間指導計画作成のススメ ～全体は部分の総和にあらず～

佐藤善人
(東京学芸大学)

1 はじめに

保健体育授業の研究会では、一単位時間の授業を参観し、そのできばえについて議論がなされます。生徒はねらいに向かって活動していたか、教師のかわり方はよかったか、教材・教具の準備は整っていたか等、目の前で展開された事象が問題となるのがほとんどです。準備される指導案には、単元指導計画は示されるものの、年間指導計画が添付されることは滅多にありません。保健体育授業づくりの第一歩は、その学校における保健体育科の目標に向かって、どのような領域や種目を選定し、どのように配列するかという年間指導計画の作成からはじまります。ところが、そのことが先生方の議論で話題になることは決して多くありません。

筆者は以前、先生方は年間指導計画の作成時にどういった資料を用いているのかを調査しました。その結果、「行政資料」「研修会資料」「経験・記憶」「学術資料」の順番で多く用いられていました。先生方は、行政が作成した資料や行政が主催した研修会の資料を多く用いて年間指導計画を作成しています。批判を恐れずに言うのであれば、年間指導計画を検討することを放棄し、行政が例として示したものをそのまま活用している学校もあると思われるのです。

2 年間指導計画を工夫するメリット

外山滋比古が著した「思考の整理学」は大ベストセラーです。これは、研究の進め方や論文の作成方法について述べた書籍ですが、その中で「全体は部

分の総和にあらず」ということが主張されています。外山は、もっている知識をいかなる組み合わせで、どういう順序に並べるかが重要であり、既存の知識を編集によって、新しい、それまでとはまったく違った価値のあるものにすることが十分自覚されていないことに疑問を呈しています。

先述のように、年間指導計画の作成は、目標に向けて領域や種目を選定・配列する作業です。中学校学習指導要領や解説保健体育編により、ある程度領域や種目に縛りはありますから、何を選定してもよいということにはなりません。しかし、どのように配列するかは学校の裁量に委ねられます。外山から学ぶならば、領域や種目をどういった順序で配列するかが重要であり、それによって、生徒に新しい学びの場を作り出すことが可能になります。そのように練られて作成された年間指導計画は、「全体は部分の総和にあらず」を体現したものになるはずです。

そこで本稿では、図1を例にしながら、年間指導計画を工夫するとどのようなメリットがあるのかを考えたいと思います。新年度に向け、年間指導計画を作成する際の参考にいただければ幸いです。

①体づくり運動：体ほぐしの運動（1年生4月）

入学して間もない1年生。複数の小学校から進学して、「友達はできるかな」とドキドキしている時期です。ここで体ほぐしの運動を位置づけます。体ほぐしの運動は気づき・調整・交流をねらっています。仲間との協力やスキンシップがある運動を実施し、「交流」を図ってはどうか。子どもたちの過度な緊張はほぐれ、学級経営がスムーズにス

図1 年間指導計画（本稿で説明する領域、種目のみを掲載。丸囲みの時数はめやす。）

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
1年	体づくり運動 (体ほぐしの運動④)	陸上競技 (長距離走⑥)		保健(傷害の防止⑥)		球技(バスケットボール⑫)	球技大会	器械運動 (跳び箱⑧)		球技 (ユニホック⑧)		武道 (柔道⑧)
2年	武道 (柔道⑧)		水泳(クロール、平泳ぎ、シンクロナイズドスイミング⑫)		球技(バレーボール⑫)	球技大会	器械運動 (跳び箱⑧)	体育理論(運動やスポーツの多様性③)				
3年			陸上競技(三種競技⑮、ハードル走、走り高跳び、ジャベリックスロー)		球技(ソフトボール⑫)	球技大会				球技・選択(卓球・バドミントン・テニス⑮)		

タートするかもしれません。

②陸上競技：長距離走（1年生5月）

長距離走の学習は冬期に行われることが多いです。トラックを周回し、少しでも速く走ることを生徒に求めています。長距離走を得意とする生徒は苦にならないでしょうが、苦手な子どもにとっては苦痛です。おまけにベアが走っている時間は寒さに震えています。この長距離走を春期に実施してはどうでしょうか。まだ気温もそれほど高くなく、気持ちよく走れます。校庭の新緑は美しく、地域によっては桜の季節かもしれません。そういった環境の中で長距離走をすると、樹木を見て走る、鳥の囀りを聞きながら走るなど、これまでと違った楽しみ方が生まれます。

③保健：傷害の防止（1年生7月）

中学校に入って、初めての夏休みを迎えます。新入生としてのよい緊張感が薄れる時期です。小学生より行動範囲が広くなり、自転車で遠出することもあるでしょう。仲良くなった友達と海や山に遊びに行くこともあるかもしれません。夏休みを前にしたこの時期に、傷害の防止について学ぶとよいと思われます。人的要因や環境要因による傷害発生のメカニズムを理解し、特に交通事故防止に対する意識を育むべきです。また、生徒だけで遊んでいるとき、万が一怪我をしてしまったらどう対処すればよいのか、応急手当の方法や医療機関への迅速な連絡の必要性を学ぶことは重要です。

④球技と行事のつながり（1～3年生9、10月）

10月の球技大会は、各クラス対抗で実施され、毎年大変盛り上がります。それに向けて授業で球技を実施します。授業と行事につながりをもたせることで、生徒は授業時間だけでなく、休み時間や放課後にも練習を自主的にするかもしれません。長期の夏休みで開放感に浸り、やや学習に集中できないのが9月です。球技大会に向け、学級一丸となって取り組むことで、学級の凝集度は高まるでしょう。

⑤器械運動：跳び箱（1、2年生11月）

器械運動で問題となるのが、準備と片付けに時間がかかることです。そのため、跳び箱を跳ぶという主運動の時間は削られ、生徒の上達を妨げる結果となります。こういった問題を解決するために、複数学年同時期に跳び箱運動を位置づけてはどうでしょうか。準備はその日に初めて授業を行う学級が行い、

片付けは最後に行う学級が担当します。そうすることで、準備はその学年・学級の実態に応じた場に変えるだけで済みます。片付けは最後の学級以外必要ありません。主運動の時間が大幅に増えることで上達し、跳び箱運動の楽しさを多くの生徒が味わえるようになります。昼休みは場がセッティングされたままです。安全を見届け、技術指導をする先生を配置すれば、もっと挑戦したい生徒や苦手な生徒が体育館に来て練習することも可能です。

⑥球技：ユニホック（1年生1月）

この学校が位置する市は、ホッケーが大変盛んです。市立A高校はインターハイの常連ですし、オリンピック選手も輩出しています。そのため、地域にはホッケー場が数カ所あり、市民が生涯スポーツとして日頃から楽しむ姿が見られます。中学校学習指導要領解説保健体育編に例示のない球技でも、「地域や学校の実態に応じて、その他の運動についても履修させることができる」とされています。ホッケーのルールや用具が簡易化されているユニホックであれば、ホッケーの特性を味わうことができます。A高校の生徒や市民が指導に来て交流するなど、開かれた学校づくりに貢献する可能性もあります。

⑦武道：柔道（1年生3月、2年生4月）

武道は中学校で必修化されています。伝統的な考え方、礼法、基本動作や基本的な技、相手の動きに対応した攻防など、様々なことが学習内容になります。一方で保健体育授業は、年間105時間という限られた中で行われるため、武道ばかりに大きな時間を割くわけにはいかないのが現実です。せっかく学んで学習内容が身についてきたのに単元は終了し、次は一年後の実施では学習の深まりは期待できません。そこで、学年をまたいだ大単元を設定してはどうでしょうか。具体的には1年生と2年生で8時間ずつ配当し、1年生では3月、2年生では4月に実施します。春休みをまたぐものの、16時間という大単元で連続して学習することが可能となります。

⑧水泳：シンクロナイズドスイミング（2年生6、7月）

水泳の学習は、泳法の習得に片寄りがちです。もちろん、クロールや平泳ぎといった泳法を習得して記録に挑戦したり、長い距離を泳いだりすることは水泳の楽しさであり、大切にすべき学習内容です。しかし、それだけが水泳の楽しさではありません。

そこで、シンクロナイズドスイミングを位置づけてはどうでしょうか。

オリンピック選手が行うような高度な技での演技は難しいです。しかし、簡単な隊形移動や上半身での表現は十分可能です。個人種目としてではなく、集団種目として水泳の学習を位置づければ、作品づくりの過程で仲間との教え合いが生まれます。2001年に公開された映画「ウォーターボーイズ」の影響もあり、シンクロナイズドスイミングは生徒の認知度も高いため、意欲をもって学習することでしょう。

⑨体育理論：運動やスポーツの多様性（2年生12月）

年末年始は、様々なスポーツイベントが行われます。サッカーの天皇杯、ラグビーの大学選手権、箱根駅伝やニューイヤー駅伝など盛りだくさんです。体育理論の学習内容である「運動やスポーツの多様性」には、運動やスポーツには、行うこと、見ること、支えることなどの多様なかわり方があり、その理解を深めることが示されています。12月にこの内容を学んでおけば、例えば、テレビで観戦するだけでなく、スタジアムや沿道で直接スポーツを観戦する生徒も出てくるでしょう。箱根駅伝をテレビで見ながら、裏方としてサポートするチームメイトや関東学連の学生による運営にも目がいくと思われます。結果として、行うスポーツの楽しさだけでなく、見たり支えたりする楽しさに気づくことができます。

⑩陸上競技：三種競技（3年生6，7月）

陸上競技の集大成として、3年生では三種競技を大単元で位置づけてはどうでしょうか。走と跳の運動に加え、投の運動も実施します。投の運動は、ジャベリックスローがよいでしょう。これは簡易なやり投げであり、ジュニアオリンピックの競技にも採用されています。例えば、走の運動は50mハードル走、跳の運動は走り高跳びを採用します。それぞれを記録によって得点化し、三種目の合計点数で競い合うのです。走や跳の運動は得意でなくても、投の運動は得意な生徒はいるでしょうし、その逆もあると思われます。得意種目の記録を伸ばす作戦もよいですし、苦手種目を重点的に練習してもよいでしょう。生徒に学習計画を立てさせ、能動的な学習を展開します。個人で得点を競うだけでなく、グループでの得点を競うことで教え合いも生まれます。

⑪球技：ラケット種目の選択（3年生1，2月）

中学校の球技では、集団種目を扱うことが多いで

す。ゴール型ではサッカーとバスケットボール、ネット型ではバレーボール、ベースボール型ではソフトボールが中心的に扱われています。もちろん、これらは大変楽しい球技であり、生徒に学んでほしい学習内容です。一方で、個人種目の球技の楽しさを味わわせることも大切です。

そこで注目するのが、卓球、バドミントン、テニスのネット型です。リオデジャネイロオリンピックの感動の記憶は新しいと思いますが、これら3種目はすべてメダリストが誕生しています。そのため、生徒の興味関心も高いと思われます。これらを選択制で実施し、個人種目の楽しさに触れるように計画します。集団種目の球技は、ある程度の人数が集まらないと行えません。しかし、個人種目であれば2名いればプレイできます。生涯にわたって行いやすく、親しみやすい球技だといえます。ただし、学習の場が体育館とテニスコートに分かれることから、複数教員を配当する配慮が必要です。

3 おわりに

ここに示した年間指導計画の工夫はあくまでも例です。必ずしも、どの学校でも効果を発揮するとは限りません。本稿で示した工夫を安易に導入するのであれば、それは行政が提示した年間指導計画をそのまま実施するのと同じことです。体育施設・用具の状況、地域性、生徒の実態等、様々な条件を検討した上で、それぞれの学校にあった特色ある年間指導計画の作成が求められます。

もちろん、年間指導計画を作成するだけでは十分でなく、これまでと同様に単元指導計画と本時案の検討が必要不可欠であることを忘れてはいけません。しかし、まずは「保健体育科でどんな生徒を育てたいのか」という目標を明確に立て、その目標に向かう第一歩として年間指導計画の作成を実施してください。きっと、「全体は部分の総和にあらず」となった年間指導計画によって、これまでとは違った生徒の姿が見られるようになるはずです。

■参考文献

- ・佐藤善人（2011）小学校におけるボールゲームの年間指導計画作成に関する研究—作成過程において体育主任が用いる資料に着目して—、体育科教育学研究27（2）19-26.
- ・外山滋比古（1986）思考の整理学、ちくま文庫、pp.48-53.
- ・文部科学省（2008）中学校学習指導要領解説保健体育編、東山書房

学校現場における スポーツ傷害への対応

山本利春
(国際武道大学)

1 学校現場における保健体育科教員の現状

学校現場における生徒の事故やスポーツ傷害の発生時に、その応急的な対応を実際に行うのは、多くの場合その場に居合わせた教員である。それらのスポーツ傷害に対して迅速で適切な対応を施す役割が求められる。特に、学校現場の中でも比較的その発生が多い運動部活動中のスポーツ傷害については、部活動の顧問（指導）教員が対応することが多いと思われるが、東京都の中学校・高等学校教員を対象にした調査では、スポーツ傷害発生時に救急処置を自信を持って行えると考えている教員は少なく、授業の中で「応急処置」を指導する立場である保健体育教諭であっても他の教科の教員と同様に、その対応に自信がないと答えている方が多い（図1）。

2 スポーツ傷害発生時に最低限の応急処置ができることが指導者の責務

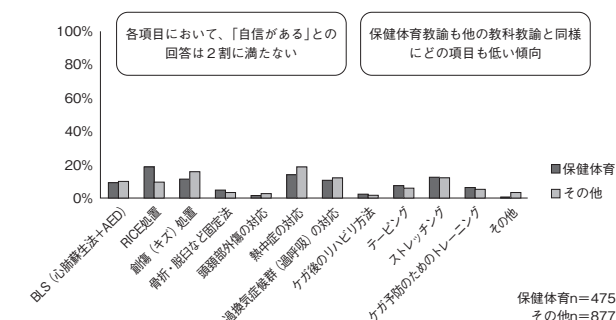
このような現状から考えると、生徒のスポーツ傷害の予防や救急処置、リハビリテーション、正しいトレーニング方法やコンディショニング方法等を指導することができるアスレティックトレーナーのような専門家を各学校に配置することが望ましいといえる。しかし、そのような体制が整うまで待つのは難しい現状であり、学校現場の部活動指導者や養護教諭の先生方がトレーナー的な（スポーツ傷害の救急処置や予防に関する）基礎知識を身に付けていく

ことが、学校現場において生徒のスポーツ傷害を減らすことの近道になると考えられる。よって、まずは指導者（教員）の方々には最低限の応急処置を身に付けていただくことを望みたい。

3 受傷直後の応急処置の重要性

スポーツ傷害で最も多いのは、捻挫だといわれている。しかし、「捻挫くらい…」と軽く捉え、適切な治療を怠ることも多い。某体育大学の学生約350名に対し、足首捻挫の受傷経験を調査したところ、80%が捻挫を経験し、うち35%が4回以上繰り返していた。受傷後も半数以上の者が、痛みや不安感などの後遺症を残していた。そのほとんどは、中学・高校時代の受傷直後に応急処置を十分に行わなかったことや、無理をしたことが原因であった。このように最初の応急処置を正しく行わなかったためにその後のスポーツ活動に支障をきたしてしまう現状は、部活動指導者の対応にも大きく左右される。例えば、足首を捻挫した後、市販の湿布薬を貼るだけ、あるいはコールドスプレーで一時的に冷やしただけで応急処置を完了したつもりになっている場合も多い。再発を予防するためには、スポーツ医学の正しい知識に基づいて、早期に適切な処置を行うこと（炎症を最小限に抑えること）が重要となる。

有効な応急処置として少なくとも「RICE処置」は知っておいてほしい。「RICE処置」とは、安静



文部科学省科学研究費助成事業
(代表山本利春：学校現場におけるスポーツ外傷・障害に関するアンケート調査の結果) より

図1 学校現場における運動部活動教員のケガの対応
「自信を持って行えますか？」

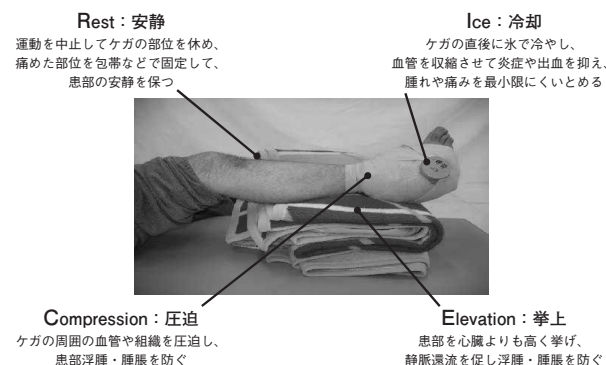


図2 外傷時の応急処置の基本

(Rest)・冷却 (Ice)・圧迫 (Compression)・挙上 (Elevation) の4つの処置のことで、その頭文字をとった名称である(図2)。「RICE 処置」は、ケガをした直後の初期治療としての基本であり、受傷直後にはこれらの処置を施すことにより、内出血を抑えて腫れを軽減し、患部の悪化を防ぐ効果がある。しかし、現場での処置はあくまで救急的なもので、痛み・腫れがひどいときや関節が異常に不安定なときは、医師の診察を促し医学的な診断と処置と受けることが必要である。

4 学校現場のスポーツ傷害への対応に向けて ～教員にトレーナー的な知識を身に付けていただくための取り組み～

前述のように、トレーナーのいない学校現場においては、スポーツ傷害が発生した際に救急処置を施すのは学校教員であり、部活動指導者や養護教諭がその役割を担うことが多い。そのため、部活動指導者や教員養護教諭は学校現場で生じた事故やスポーツ傷害に対する最低限の救急処置を習得しておくことが必要である。これらのことから、我々は学校教員(部活動指導者、保健体育科教諭、養護教諭)を対象とした救急処置やスポーツ傷害予防のためのコンディショニングに関する講習会を積極的に実施している。講習内容は、RICE 処置や止血法、創傷処置、テーピングなど、現場の先生方が必要としている問題点や具体的な要望をあらかじめ聞き、実践的な講習を実施している(図3)。RICE 処置については、アイスパックの作り方から、足関節捻挫を始めとした処置、止血法、創傷処置については、基本的な止血方法と、絆創膏や滅菌ガーゼ、ディスポ手袋を使用しての創傷処置、テーピングについては、足関節捻挫に対する固定のテーピングなどである。また、傷病者の運搬法や脱臼、骨折などの固定法も実技講

習として取り入れている。

1) 運動部活動指導者を対象とした講習会

千葉県(教育庁体育課が主催)では、毎年運動部活動指導者(特に保健体育科教員以外の教員)を対象に講習会を開催し、その内容の企画と講師を我々が担当させていただいている。部活動指導者は保健体育以外の教科を専門とする教員もいるため、スポーツ現場での運動部活動を指導する上で、スポーツ傷害における救急処置と傷害予防の対応を最低限必要な知識や技術として習得しておくことは非常に有意義な試みであると考えている。RICE 処置は肩関節捻挫、大腿部肉離れ、足関節捻挫等のケガを想定した部位別処置、トレーニングについては、肩関節脱臼、腰痛、オスグット病、足関節捻挫を想定した予防のためのトレーニング、ストレッチングについては、投球障害肩、腰痛、オスグット病、シンスプリント等に関わる部位のストレッチングを行う(図4)。今後、千葉県だけでなく、他の多くの都道府県でもこのような講習会が開催されることを望みたい。

2) 教員免許状更新講習会参加者を対象とした講習

本学では、文部科学省の認定を受け教員免許更新制に基づき現職教員を対象とした教員免許状更新講習会を開催している。2015年度は、選択(保健)領域18時間の講習に当てはめ、「学校・スポーツ現場の救急処置と事故対応」をテーマに3日間の講習を実施した。内容は、スポーツ現場での事例も含めながら、前述のスポーツ外傷発生時の基本的な救急処置(部位別 RICE 処置、止血法、固定法、運搬法など)や、心肺蘇生法、頭頸部外傷時の対応について、講義および実技講習を行う。心肺蘇生法については、訓練用ダミーと訓練用自動体外式除細動器(AED)を用いた一次救命処置、頭頸部外傷時の対応につい

- ✓ RICE処置
- ✓ 創傷処置
- ✓ 運搬法・固定法

学校内だけでなく、各種大会での
救護活動でも必要となる対応

- ✓ RICE処置(部位別も含む)
- ✓ 一次救命処置
- ✓ 傷害予防のためのストレッチング・トレーニング



図3 養護教諭を対象とした講習会(千葉県各地域)



図4 千葉県運動部活動指導者講習会

ては、受傷時の重症度評価の方法と頭頸部の固定保持方法を実際の場面を想定して実施する。

さらに、3日間のうちの最終日は、スポーツ現場における緊急時対応計画の立案に取り組んでいる。これは、学校現場において発生しうる事故やケガに関わる様々な状況を想定し、それらに対応できるような具体的な行動計画を立てるための演習である。学校現場で実際に行われている球技大会、スキー実習、マラソン大会などを想定して、事前の確認事項や必要物品、緊急時のフローチャート作成などをグループワークにて実施している。

3) 保健体育教諭志望学生（教職履修者）を対象とした講習会

体育系大学の多くは、保健体育教諭の教員免許を取得できる教職課程を有し、保健体育教諭の育成を担っている。前述のように学校現場における教員がトレーナーの基本的な能力を持ち、救急処置対応や予防のためのコンディショニングなどの指導ができることが求められるのであれば、体育系大学での教員育成の一環としてトレーナー的な知識や技術を身に付けさせることが合理的である。

本学では、昨年より4年時の教育実習前に実施される「教育実習事前指導」の一環として、救急処置およびスポーツ障害予防のためのコンディショニングに関する講習を組み込み、将来保健体育教諭を目指す学生には、必ず受講してから現場実習に行かせる試みを実施している。体育系大学の使命として、また教育的な観点から、トレーナー的な知識を身に付けた保健体育教諭を育成することは学校現場における事故防止、的確な事故対応において重要である。

主に、救急処置およびコンディショニングの理論（講義）、心肺蘇生法、頭頸部外傷の対応、RICE処置、スポーツ外傷・障害予防のためのトレーニングおよ

- ✓ RICE処置（部位別も含む）
- ✓ 一次救命処置
- ✓ 頭頸部外傷
- ✓ 傷害予防のためのストレッチング・トレーニング

- ・スポーツ医科学的な知識を身につけた体育指導者の育成
- ・教育実習事前指導の活用



図5 教育実習事前指導（国際武道大学）

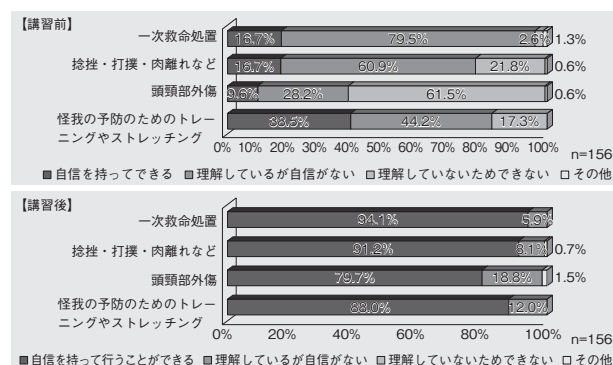


図6 講習会前後のケガの対応に対する自信の変化

びストレッチング（実技）を各1回90分×4回を教育実習直前時期の授業時間に組み込む（図5）。

このような講習に参加した学生に対して、講習会前後で、救急処置やコンディショニングの指導に関わる意識調査を行ったところ、運動部活動指導者講習会の結果と同様に、講習後は講習前に比べて「自信を持って対応することができる」と回答した割合が増えている結果であった（図6）。体育系大学の多くは、救急処置、救命処置の授業が1年次のような下級学年時に履修しており、教育実習に行く4年時の頃には忘れている者も多い。また、教育実習のような現場に出る際に学ぶ方が学習意欲も高い。現職の教員を対象とした講習会と同様に、将来保健体育教諭を志す学生に対しても、教員養成課程の段階から実践的な能力を指導・教育する機会を作っていく必要があると考えられる。

5 まとめ

学校現場においては、児童・生徒の事故やスポーツ外傷・障害に対して最初に対応しなければならないのは教員であり、救急処置やコンディショニングに対して正しい知識を持ち、的確に対応できる教員が必要である。今後、様々な場で多くの指導者（教員）を対象に救急処置やコンディショニングに関する講習会を開催していく必要があると考えられる。

参考文献

- ・山本利春、笠原政志：国際武道大学での取り組み、学校スポーツにおける外傷・障害診療ガイド、臨床スポーツ医学（29：臨時増刊号）：58-64、2012.
- ・山本利春：学校スポーツにおける指導者のトレーナー的な知識普及の必要性——部活動指導者、養護教諭、体育教員、教員志望者へのアプローチ、Sportsmedicine No.163:13-16、2014.
- ・山本利春：養護教諭が知っておくべき学校現場のケガの応急処置（連載計12回）、健康教室、67(5):2016-68(3):2017.

平成29年度用副読本（ルール）の主な変更点

すでにご承知の先生方も多いことと存じますが、ルールの変更に伴い2017年度版の教材を以下のように修正致しました（『ステップアップ中学体育2017』に掲載できた範囲に限ります）。

ハンドボール

■どんなスポーツ？（p132）

競技人数を「1チーム7人（ゴールキーパー1人、コートプレイヤー6人）」から「1チーム7人（コートプレイヤーが7人同時に出てよい）」に変更しました。

■ハンドボールのおもなルール（p148, 149）

用語の一部を変更しました。

「ダブルドリブル」→「イリーガルドリブル」, 「チャージング」→「オフエンシブファール」

サッカー

■サッカーのおもなルール（p167）

「キックオフの方法」を「主審の笛の合図後、センターマークから前方へける。」から「主審の笛の合図後、センターマークからける。明らかにボールが動けば前方でなくてもよい。」に修正しました。

■ボールがフィールド外に出た場合（p167）

「コーナーキックとなる場合」を「①攻撃側プレイヤーが…コーナーアーク内に…おこなう。」から「①攻撃側プレイヤーが…コーナーエリア内に…おこなう。」に修正しました。

■反則があった場合（p168）

「直接フリーキックとなる場合」に「⑪身体的接触によって相手を妨げる（コンタクト・インピーディング）」を追加しました。

■警告・退場（p168）

解説文「警告、退場は…程度ではなく状況（チャンスの芽をつむ、得点の機会の阻止）や…ものもある」を「警告、退場は…程度ではなく状況（大きなチャンスとなる攻撃を妨害する、得点の機会の阻止）や…ものもある」に修正しました。

中学保健体育科ニュース 2017年 No.1 (通算23号)

2017年3月15日発行

●編集 大修館書店編集部

●発行所 株式会社 大修館書店

〒113-8541 東京都文京区湯島2-1-1

TEL 03-3868-2298 (編集部) / FAX 03-3868-2645

【出版情報】 <http://www.taishukan.co.jp>

●印刷・製本 広研印刷株式会社